

神戸女学院史料室だより

学院史のための「史料室委員会」が編成されてよりようやく二年半。今年度の史料室は従来通常の業務を遂行すると共に、昨年度末に創刊した『学院史料』の第二号をこれもまた年度末に発行と決め、初秋よりその執筆、編集を手がけてきたが、前回と同様河北印刷株式会社の担当員諸氏の懇切の御協力を得て初校に目を通したところで、年を越した。

この一年をふりかえれば、一九八三年早々はやはり『学院史料』創刊のための諸事に（実務担当者は執筆と編集全般を兼ねていることから）没頭してすごしたと言うしかないが、そのほとぼりのさめた三月初旬、執務室三度目の移転のことを承り、ほぼ六年半蟠踞してきた大学文学館内の旧学長室を出て、元宣教師住宅グリーンウッド館（工房とするにはあまりにも長閑な隠棲所の趣きがある）に仕事場を構えた。

それから新年度に入って、人事の面に多少の異動が生じた。

まず史料室委員会としては、高道 基教授の退任（新島学園女子短期大学学長に御就任）によりチャブレン茂 洋教授が委員を委嘱された。三木俊秋教授は内地留学のため九月より事実上欠席。任意参会の学長、中高部長は、今年度から岡本道雄学長（院長兼任）、加藤民雄中高部長となる。また実務担当の方では、従来メンバーに加え新たに、宣教師文書翻訳のために山本純子姉、庶務遂行のために栗木順子姉に随時の協力を願ひ、賑やかに仕事に励んでいる。

この秋、渡辺久雄史料室担当顧問が多年に亘る鳥取県三朝町の教育に対する貢献の故に同町から表彰されたことは、縁ある者の目に慶ばしいことであつたが、一方最大の痛恨事は、史料室の生みの親とも言ふべき和島芳男先生の長逝である。本学院岡田山学舎時代の歴史のほとんど全域を御存知であつた先生の歴史家らしい炯眼を偲び、史料室に遺された学院史関係文書類の厩大な史料ファイルを見るにつけ、その衣鉢を継いでゆくに相応しい史料室であらしめたいとの思いを一入深くするものである。

（若山 晴子）